

従軍慰安婦という悪質な虚構

(2)

日本という国は、自国に誇りを持たない日本人が増えていると言われている。そして現代社会には、耳を疑うような事件や犯罪が後を絶ちません。非行に走る人間の志操(しそく)の喪失は、歴史の無知と無関係ではない事が立証されています。非行の撲滅には、正しき歴史認識の大切さが謳われているのです。私達日本人の先祖がどういう道程を歩き、

いかに立派な偉業を成し遂げ、日本に根付く伝統がどれだけ素晴らしいものなのか？大人達は小人達に一つでも多くを指し示さなければならぬ使命があると思います。

今月号も先月号に引き続き、『従軍慰安婦問題』についての重要項目を挙げて、考察していきましょう。

【証言その①…亀山一二氏の告白】

岐阜県の初代関市長だった亀山一二(かめやまいちじ)氏という人は、日米開戦時、外務省大臣官房電信課長を務めた人物で、「真珠湾攻撃」開戦のいきさつを直接知る、貴重な証人の一人です。亀山氏は「あれは

不意打ちだったのですか？」という質問に対して、「真珠湾攻撃の三十分前に、アメリカ軍に通告する様に伝えるのが、私の最重要任務だった。私は攻撃前日、その打電の場にいたのだ。不意打ちには絶対にあり得ない」と、当時の様子を詳細に語っています。

【証言その②…杉原千畝氏の告白】

杉原千畝(ちうね)氏は、六千人のユダヤ人にビザを発給し、世界中のユダヤ人から「日本のシンドラ」と呼ばれて全世界の人達から尊敬の念をむけられた方です。岐阜県は八百津(やおつ)町出身で、亀山一二氏と同じ外務省元職員という人物です。

日本は昭和十二(一九三七年)年の閣議でユダヤ人保護を国策と定め、第二次世界大戦中は満州国境にひしめく数万人のユダヤ人を危機から救い出したという素晴らしい歴史があります。国策ですから、杉原さんの立場なら当然ビザを発給できました。学校で教わり、世間では通説となっている様に、一人の判断でやったというのではない様です。この様な歴史的事実は、戦後の教育と大きく懸け離れている事が多々あるという事実の証明でもあるでしょう。

【証言その③…若狭和朋氏の告白】

若狭和朋(わかさかずとも)氏は、

岐阜県の高校で生徒指導部長を務め、退職後の現在は「発言集団シューレ」の代表に就任されている方です。若狭氏の母親は、南支那派遣軍広東第一陸軍病院の開設当時の総婦長、つまり従軍看護婦だった人物です。若狭氏が歴史教科書に「従軍慰安婦」という言葉が登場した時すぐに「おかしい」と感じ、従軍看護婦だった母親に尋ねると、

若狭氏の母親は教科書を見た瞬間に「そんな馬鹿な話はない」と、呆れるような口調で言ったそうです。従軍といえど身分は軍属であり、戦死したら靖国神社に祀られる。「従軍慰安婦」など、そんな言葉はなかったと言うのです。調べると、事実はその通りなのです。「従軍慰安婦」だけではありません。南京大虐殺も韓国の植民地化というのも嘘(これは内地化であり、現地民を搾取する植民地化ではない)。また、日中戦争や日米開戦は日本側から仕掛けたという話も、全てデタラメだったのです。しかしそういう誤った歴史教科書が幅を利かせ、志操の喪失を図られているのが現代教育界の実情なのです。

【従軍慰安婦のイメージができるまで】

韓国の歴代大統領には一貫して二つの政治方針がある様です。それは反共産と反日。最近、反共産のほうは薄れ

つつあるようですが、反日は依然として健全です。なぜ反日が政治方針の一つなのか？国民の関心を反日に向け、それを求心力の基盤にする事が出来るからです。そんな政治手法が韓国の歴代大統領に一貫していることは否定できません。

これは韓国だけではなく、中国も同じ。反日を打ち出せば、国民の志気が高まり、国内が容易にまとまるからに他なりません。

昭和五十七年、全斗煥(チョン・ドゥファン)政権の時、日本の教科書が「進略」から「進出」と書き換えさせられたと朝日新聞が報じ、中国がこれを取り上げて日本に厳しい批判を加えてきました。この朝日新聞の報道は大誤報で、その様な書き換えがなされた事実はありません。ですが、日本政府の狼狽ぶりを見て、この時に韓国は歴史を問題にすれば、日本を揺さぶれることを学んでしまいました。これが『従軍慰安婦問題』の伏線になったことは疑いのないことです。

【吉田清治の嘘】

初めて直接的に『従軍慰安婦問題』が浮上したのは、この教科書問題があった翌年の事です。火をつけたの

は、日本人の吉田清治氏が『私の戦争犯罪 朝鮮人の強制連行』と題した捏造本を出版したのです。その中に「済州島で女性を狩り立て、強制連行して日本軍相手の売春婦にした」という告白が書かれてあるのです。なお、「売春婦」や「強制連行」という言葉も、この本が初出なのです。この吉田清治氏は、韓国のテレビにも出演して、同じ告白をしています。彼の意図がどこにあったのかはハッキリしていません。恐らく自分の戦争犯罪を告白する事で、反日派の中で顔になるうという売名のウエイトが大きかったように思われます。最もそれで一気に『従軍慰安婦問題』が浮上したわけではありません。韓国でも戦前を知らない世代が増えてはいましたが、強制連行なんて無かった事実を知っている世代もまだ残っていて、テレビで強制連行を告白する吉田清治を観て「嘘をついて自分の国を悪く言っているこの人は、無事に日本へ帰れるのだろうか…」、と心配する反応も多かったと言います。また、済州新聞の女性記者は、吉田清治の本に基づいて済州島を隈無く調査したのですが、本に書いてあるようなことは一例も発見できな

かったというルポルターージュを掲載しています。済州島を調査したのはこの女性記者だけではありません。日本人歴史学者の秦郁彦（はたいくひこ）氏も綿密な現地調査を行いました。やはり強制連行を証明する例は一つも発見できなかった。吉田清治自身、問い詰められて、全くの嘘であることを認めています。「溺れる者は藁をも掴む」という事でしようか。吉田氏の本は全くの捏造、虚構、でっち上げだったのです。しかし嘘でも何でも、これによって『従軍慰安婦』の種が蒔かれたことは確かです。韓国では日本の憲兵隊が平和を農村に持ってきて若い女性達を狩り立て、それを取り返そうと追いつがる家族を銃で殴り倒す、といった非情なドラマが何本も放映されました。この種のドラマで女性を強制連行するのは、なぜか憲兵隊と相場が決まっています。

強いられたという、いわゆる『従軍慰安婦』のイメージが出来上がっていったことは確かであります。

【全ては朝日新聞の捏造から始まった】

『月刊誌 WILLY (ウィル)』五月号が『従軍慰安婦問題』を特集しました。その中で、東京基督教大学教授の西岡力氏が、『従軍慰安婦』のでっち上げに、朝日新聞がいかに関わってきたかを、詳細にレポートしています。そして、このレポートで『従軍慰安婦問題』の捏造を全体的に見通す事が出来ます。内容は、昭和五十七年（一九八二）まで『慰安婦問題』など全く囁かれる事が無かったのですが、この年、朝日新聞による「侵略」↓「進出」への教科書書き換えとの誤報が一つの切っ掛けとなり、『慰安婦問題』がうそぶかれたこと。これにより韓国は、たとえ虚妄であろうと、日本には歴史問題を利用すれば、日本を批判し、援助・協力させる事ができるという悪習を学んでしまった事などがまとめられています。

特集は他に、櫻井よしこ氏や古森義久氏の力のこもった論文や、レポートを収めています。時の宮沢喜一内閣の初代官房長官だった加藤紘一氏は、事実を調べる前に直ちに「お詫びと反省」なる談話を発表し、謝りました。

続いて、訪韓した宮沢首相が謝罪しました。そして平成五年（一九九三）、宮沢内閣が総辞職する前日に、第二代官房長官の河野洋平氏が発表した談話が、この問題を決定的にしてしまいました。俗に河野談話は、慰安婦（売春婦）の移送にも軍が関与した事を認め、全面的に謝罪するものでした。こうして『従軍慰安婦問題』は公式のものとなり、日本はのっぴきならない汚名を被る事になってしまったという歴史があるのです。

次号は、旧日本軍が強制連行どころか「占領地の女性に被害を及ぼさない」事を条件に掲げて、世界に類を見ない政策で治安維持に当たったという事例を挙げて考察していきます。

（次号に続く…）



合掌 副住職 谷川寛敬